

# 風待ち

今井一隆

【登場人物】

千夏	津田	真由美	綾子	久美子	美奈	小山	後藤
(女)	(男)	(女)	(女)	(女)	(女)	(男)	(男)
30	35	20	48	48	25	25	25
					/	/	/
					2	2	2
					2	2	2

\*

北国の、とあるアパートの一室。  
漆喰の白い壁。

上手に窓。今、窓のカーテンは閉まっている。

壁のフックに、ソフトスリツの上着が一着、吊り下がっている。

手前にカラーボックス。上に電話機。

さらに手前に小さなテレビ台。上に14インチのブラウン管テレビが置かれてある。  
窓の下にソファ。

ソファの前に丸い卓袱台。

下手奥に出入口。

出入口の手前に台所。石油ストーブと冷蔵庫、ガスレンジ、流し台。

流し台の上にインスタントコーヒーと電気ポット。

台所の床に黒いごみ袋がひとつ、置かれてある。

※

開演のベルが鳴る。  
客席の明かりが落ちると、壁をスクリーンにして映像が映し出される。  
路地、古びたアパート、大学の構内、海、風、そして砂……。

1 【1992年6月】

〔砂〕の映像が流れる中、若い男が現れる。  
男の名は小山。

白いワイシャツにスラックス姿でテレビの前に座り、ファミコンのコントローラーを手に取る。  
映像が終わり、舞台に明かりが入る。

小山  
（ブラウン管テレビの画面をぼうつと見つめ）……。

しばらくして、この部屋の主、後藤が現れる。

小山  
（振り返り）あ……。

後藤  
なんだ。起きてたのか。

小山  
おかえり……。

後藤  
カーテンくらい開けるよ。

小山  
ああ……。

後藤、カーテンを開ける。

窓から差し込む朝の陽光に、小山、目を細める。

小山 ……。

後藤 飯は？

小山 ん？

後藤 朝飯。

小山 ああ、まだ。どっか、食い行く？ マックか、なんか。

後藤 いいよ、俺は。

小山 なんで？

後藤 おまえ、一人で行って来いよ。

小山 奢るよ。

後藤 だから、いいって。

小山 遠慮すんなって。どうせ経費で落とすんだから。

後藤 俺、いつも、朝、食わねえから。

小山 ……ああ、そう……。あ、コーヒー、飲むだろ？ お湯、沸かしてる。コーヒーカップって

後藤 ……。(と、腰を浮かす)

後藤 自分でやるから。

後藤、流し台の前へ行く。

小山  
……。

小山、カーテンをカーテン留めにまとめる。

小山  
(窓の外に目をやり) 午後から雨だって。

後藤  
(コーヒーの準備をしながら) ああ？

小山  
雨。天気予報。

後藤  
ああ。

小山  
やっぱ、この時期、多いよな。梅雨がないとかいうわりに。

後藤  
蝦夷梅雨だろ。

小山  
え？

後藤  
エゾツユ。

小山  
エゾツユ？

後藤  
いうだろ、エゾリス、エゾシカ、エゾツユ。

小山  
いうか？

後藤  
いうよ。聞くだろ？ 天気予報で。

小山  
へえ。

後藤  
へえ、って……。

小山 俺、大学でこっちくるまで、天気予報っていったら関東地方のやつしか見たことなくてさ。一都六県の。だから北海道の人とか、子供心に、すげえ同情してた。

後藤 同情？

小山 うん。気の毒にって。

後藤 何が気の毒なんだよ？

小山 だって、北海道で関東地方の天気予報なんか放送されてもさあ。

後藤 なんて北海道で関東の天気予報、流すんだよ？

小山 だから、そういうことだよ。

後藤 は？

小山 そういう勘違いしてたって話。あ、メタルスライム！

低く、ゲームの音。

後藤 ……。おまえ、電話したのか？

小山 (ゲームのことと思ひ) 電話？

後藤 マジで取り返しのつかないことになるぞ。

小山 (違ふとわかり) ……後でするよ。

後藤 今、しろって。んなことやってる暇があるなら。今なら、まだ間に合うかもしれねえし。



メタルスライムが、逃げたようだ。

小山 あ。もう、横でごちゃごちゃ言うからあ……。

後藤 小山！

小山 フレックスだよ。

後藤 あ？

小山 フレックスタイム！ こんな時間、まだ誰も出社してねえよ。

と、女の声がする。

女 (声) マーくん、帰ってたの？

女、紙袋を手に、現れる。

女の名は美奈。

美奈 ずいぶん早かつ (たのね) ……。 (小山を認める)

小山 ……。

美奈 小山、くん……？

小山 どうも……。

美奈 何してんの、こんなところで!?

小山 や……、ドラクエ……。

美奈 は?

小山 (ゲームを切る) ていうか、美奈ちゃんこそ、なんで……??

後藤 あ!

小山・美奈 ?

後藤 今日、水曜?

美奈 うん。

後藤 やべ。燃えるゴミ。

後藤、黒いゴミ袋を持って、去る。

美奈 びっくりしたあ。部屋、間違えたのかと思った。

小山 ……あ、コーヒー、飲む?

美奈 ああ、いいよ、やるから。

小山 ……そう。

美奈、ポットのお湯でコーヒーを入れる。

小山、ファミコンをテレビ台の下に片付ける。

美奈 (コーヒーを淹れながら) いつ?

小山 え?

美奈 こっちへは、いつ、来たの?

小山 ああ。ゆうべ。

美奈 ゆうべ?

小山 うん。最終の飛行機で。だから、ホテル、ぜんぜん、とれなくて……。

美奈 そう。出張?

小山 ん? んん、ていうか……。

美奈 あ、リクルーター?

小山 え?

美奈 だったら、あたし、面接してよ。女子なんて、ただでさえ就職ないのに、この景気でしょう?

小山 「資料請求」のはがき、手に入れるだけでも一苦労なんだから。

美奈 ……。

ウソ、ウソ、冗談。そんな困った顔しないでよ。はい。熱いよ。

美奈、カップを卓袱台に置く。

小山 ありがとう。

美奈 けど、何年ぶり？

小山 ん？

美奈 卒業して二年……、もう、三年になるのか。

小山 ああ、うん。

美奈 早いよねえ。

小山 いただきます。

小山、コーヒーを一口飲む。

美奈 どう？

小山 ん、美味しい。

美奈 (笑う) じゃなくて。

小山 ？

美奈 仕事。もう、慣れた？

小山 ああ、まあ、そりや……。

美奈 名刺、ないの？ 小山くんの名刺。

小山 あるけど……。

美奈 見して見して。

小山、立ち上がる。  
壁にかかったスーツの内ポケットから名刺入れを取り出す。

小山 はい。(と、名刺を一枚)

美奈 (受け取り) ありがと。……あれ? 営業部? 経理とかいってなかった?

小山 異動になったんだよ。

美奈 そうなんだ。なんか想像つかないな。小山くんが「営業」なんかしてるって。

小山 美奈ちゃんは?

美奈 ん?

小山 行ってるの? 大学院。

美奈 行ってるよ。

小山 今日は、休み?

美奈 今日は午後から。

小山 ああ……。サークルは?

美奈 え?

小山 映研。たまには、顔、出したりしてるの?

美奈 ううん、今は、もう、ぜんぜん。

小山 そう……。どうして?

美奈 どうして?

小山 ん？ いや……。

と、後藤、戻ってくる。

後藤 あぶねえあぶねえ、ちよūdō収集車、出るところだった。

美奈 あ、マークくん、それ、脱いじゃって。

後藤 え？

美奈 Tシャツ。洗濯、行ってくるから。

後藤 ああ。

美奈 (小山に) あ、これ、ありがとう。(と、名刺を)

小山 ああ……。 (受け取る)

美奈、紙袋に洗濯物を詰める。

後藤、Tシャツを脱ぎ、美奈に渡す。

美奈 (それを紙袋に詰め) じゃ、ちよūtto行ってくるね。

後藤 うん。

美奈 小山くん、また。

小山 うん……。

美奈、去る。

後藤、新しいTシャツを取り出し、着る。

小山 何がマーくんだよ。

後藤 (着替えながら) え？

小山 おまえら、いつのまに、そういうことになっちゃってんだよ？  
何が？

後藤 付き合ってるなら付き合ってるって言えよ。

小山 言っただけ？

後藤 聞いてねえよ！

小山 そうだっけ？

後藤 「そうだっけ？」じゃねえよ。なんで隠すんだよ？

小山 べつに、隠してねえだろ。

後藤 隠してんだろ？！

小山 つか、いちいちおまえに報告しなけりゃならねえ義務でもあんのかよ？

小山 ……。おまえ、よく、言ってたよな？

後藤 あ？

小山 女優に手え出すって、映画監督として一番やっちゃいけないことだつて。そういうの、画に

現れるからって。

後藤 もう女優でも監督でもねえよ。

小山 いいのかよ、それで？

後藤 何が？

小山 「革命」起こすんじゃないかったのかよ？

後藤 カクメー？

小山 8ミリで映画に革命起こすんだって……。

後藤 起こるかよ、バカ。

小山 だからおまえが言ったんだって！

後藤 そんなことより、もう、誰か来てるんじゃないか？

小山 え？

後藤 電話。

後藤、出て行こうとする。

小山 どこ行くんだよ？

後藤 便所だよ。

後藤、去る。



小山 (電話に目をやり) ……。

コーヒーを飲み干し、溜息をつく。  
暗転。

2【2015年2月】

昼。

石油ストーブの火が点いている。

卓袱台に男と女。

男の名は津田、女の名は久美子。

津田 まあ、あくまで一般論なんですけど。こういう場合、たいてい、裁断するか、ゾッキ本として古本屋に流すかで……。

久美子 ゾッキボン？

津田 いわゆる新古本、特価本、バーゲンブックのことです。

久美子 それって、どこにお願いすれば……？

津田 そういうのを専門に扱ってる業者があつて。

久美子 どこに聞けば……？

津田 僕も何社か知ってますから、紹介することはできますけど……。

久美子 あ、じゃあ、是非。

津田 ただ、ほんと、二束三文になっちゃいますよ？

久美子 お金は、どうでも。裁断するのって、やっぱり、ちよつと気が咎めるんですよ。

津田 けど、中村さん、どう思うかな？

久美子 え？

津田 そんなふうに自分の仕事を叩き売られるくらいなら、いつそ、裁断してほしいんじゃないかなって。

久美子 ……。

津田 いや、もちろん、奥さんの判断で全然かまわないんですけど。中村さんの本心なんて、誰にもわかりっこないんだし。

久美子 はい……。

津田 いずれにしろ、ダンボールに詰めた分は、ウチの会社の倉庫で預からせていただきます。

久美子 ご迷惑じゃありません？

津田 上には、もう、話を通してありますんで。

久美子 すいません、ご無理言って。

津田 いえいえ。中村さんには、いろいろお世話になりましたから。

と、久美子の娘・真由美が、ヤカンを手に現れる。

真由美 どう？

久美子 え？

真由美 出た？

久美子 ああ。ううん。（と、首を振る）

真由美 (舌打ち) やっぱ、水道屋さんに頼まないとダメなのかなあ。(去ろうとする)

津田 まあ、もうちよつと様子見てみようよ。

真由美 ? (立ち止まる)

津田 様子、見てみようよ。慌てる乞食は貰いが少ない、ってね。

真由美 あたし?

津田 え?

真由美 乞食って。

津田 え?

真由美 え?

津田 あ、いや、ことわざ、ことわざ。

久美子 あ、そうだ。お茶入れようとしてたんだ。(津田に) ごめんなさい、あたし、うっかり……。

津田 ああ、どうぞ、おかまいなく。

と、電話が鳴る。

久美子 (出て) もしもし。……ああ。今、どこ? 何が見える? ……そう。は、そこで待ってて。

今、迎えに行くから。(電話を切る。津田に) ……ちよつと、ごめんなさい。

津田 あ、はい。

久美子の行く手を真由美が塞いでいる。

久美子 もう、ムダにデカイんだから。

久美子、真由美の尻を叩いて去る。

真由美 ……。

真由美、冷蔵庫からペットボトルのウーロン茶を出し、コップに注ぐ。

真由美 どうぞ。(と、コップを卓袱台に置く)

津田 ありがとう。

真由美は右手の人差指に包帯を巻いている。

津田 (それに目をやり) 大丈夫？

真由美 ?

津田 指。

真由美 ああ、ええ、もう……。 (包帯の巻かれた指を折り曲げてみせる)

津田　　ちゃんと言者に診せた？

真由美　　そんな、大袈裟な。ちよつと火傷しただけですもん。

津田　　診せた方がいいよ。万が一ってこともあるし。

真由美　　万が一？

津田　　うん。

真由美　　たとえは？

津田　　え？

真由美　　万が一って、たとえば？

津田　　たとえば？

真由美　　え？

津田　　え？

真由美　　え？

廊下で声がする。

話しながら久美子、戻ってくる。

続いて綾子、現れる。

久美子　　どうぞ。

綾子　　おじやまします。あー、真由美ちゃん、久しぶり！

真由美 あ、ご無沙汰してます。

綾子 まー、ちよっと見ない間に、すっかり大人っぽくなっちゃってえ。

真由美 え、そうですか？

綾子 なんか、自分の学生時代を見てみたい。

真由美 はあ……。

久美子 (津田に) こちら、金井綾子さん。あたしの大学時代の同級生の。(綾子に) 津田さん。中村が、昔、勤めてた会社の……。

綾子 ああ。

津田 どうも。

綾子 はじめまして。

久美子 (綾子に) 座って。ウーロン茶でいい？ 水道、凍結しちゃって、お湯、沸かせないんだ。

綾子 ああ、うん。

久美子、コップにウーロン茶を注ぐ。

綾子 真由美ちゃん、それ、どうしたの？

真由美 はい？

綾子 指。

真由美 ああ、うん、ちよっと、火葬場で……。

綾子 火葬場？

久美子 そそつかしいのよ。中村に似て。(と、コップを置く)

綾子 ありがと。

真由美 ママのせいでしょ？

久美子 何がよ？

真由美 だってそうじゃない。あたしがちゃんと受け取る前に、箸、引っ込めるから……。

久美子 だからって、落とした骨、素手で拾う人がある？

真由美 骨が、あんな熱いと思わなかったんだもん……。

久美子 熱いに決まってるっしょ。焼いたばかりなんだから。だいたいあんた箸の持ち方おかしいのよ。

真由美 ママの躰が悪いんでしょう？

綾子 ……。

津田 まあまあ。真由美ちゃんも動揺しちゃったんだよね。

真由美 ドーヨー？ ああ、なんだ、そっちの。

津田 え？

真由美 ドーヨーっていうから。ハハハ……。

津田 ……ハハハ……。(腕時計に目をやり) あ、僕、そろそろ会社に戻らないと。

久美子 お忙しいとこ、すいませんでした。

津田 いえいえ。じゃ、ちよつと考えてみてください。



久美子 はい？

津田 ゾッキ本か、裁断か。

久美子 ああ……、はい。

津田、立ち上がる。

津田 (綾子に) では。(と、会釈)  
綾子 どうも。(会釈)

津田、去る。

久美子 真由美。

真由美 何？

久美子 手伝いなさい。

真由美 何を？

久美子 荷物、車に積むの。

真由美 あたし？

久美子 あんたしかいないでしょ。

真由美 あたし、怪我人なんですけど。

久美子 大袈裟な。(去る)  
真由美 ……。

真由美、渋々、去る。

津田 (声) あ、すいません。じゃ、そっち。

真由美 (声) はい。

津田 (声) せーの。

真由美 (声) うう……。 (重い)

津田 (声) 大丈夫？

真由美 (声) うう……。

久美子 (声) 気をつけてくださいね。階段、雪で、すべりやすくなってますから。

一人、残る綾子。

綾子 (部屋を見回し) ……。

声、遠くなる。

やがて久美子、戻ってくる。

久美子 ごめんね。バタバタしてて。

綾子 何？

久美子 ん？

綾子 荷物って？

久美子 ああ。本よ。

綾子 本？

久美子 売れ残ったり、返品されたりしたやつ、津田さんの会社の倉庫で預かってもらうことになったの。

綾子 そうなんだ。……ここで、ひとりで暮らしてたんだ？ 中村くん。

久美子 ……うん。

綾子 いつから？

久美子 もう、十年。

綾子 そうだったの。なんでそんなことになったのよ？

久美子 一言で説明できないよ。

綾子 ……。あ、そうだ、これ。

久美子 ？

綾子、  
香典袋を出す。

綾子　こんなところで、あれだけど。

久美子　ああ、いいのよ。手伝いに来てもらって、こっちが払わなきゃいけないくらいなんだから。

綾子　それとこれとは話が別よ。

久美子　……そう？　じゃあ。

綾子　で、どうするの？

久美子　何？

綾子　骨。

久美子　え？

綾子　中村君のお墓。

久美子　どうするって？

綾子　お骨、どこに納めるつもり？

久美子　ああ。うちの実家の……。

綾子　そこに別れた亭主を入れるつもり？！

久美子　法律上は、別れてないもの。

綾子　そんなの紙の上だけの話でしょう？　十年も別居してれば「別れた」も同然じゃない。

久美子　……。

綾子　なんで久美子がそこまでしてやらなきゃなんないの？

久美子　だって、あの人、他に身寄りもないし……。

綾子 あるじゃない！

久美子 え？

綾子 喪主だって、あの女にやらせればよかったのよ。

久美子 ……そういうわけにはいかないよ。

綾子 中村くん、勝手すぎるよ。こんな死に方するのも自業自得だよ。

久美子 よしてよ、そんな言い方。

綾子、お茶を一息に飲み干す。

と、真由美が戻ってくる。

真由美 ママ。

久美子 ？

真由美 お客さん。

久美子 え、誰？

真由美 (首をひねる) ……。

そのとき、水道の蛇口から水が流れ出した。

一同 (その方を振り返り) ……。

シンクを叩く水の音。  
溶暗。

3【1992年6月】

暗転中、水道の水音は、雨音に変わる。  
午後。

卓袱台の前に小山と美奈。

小山　ほんと、参っちゃうよ。普段は課長、滅多に電話なんか取らないくせに、こんなときに限つ

て、出ちゃうんだもん。ハハハ……。

……。

小山　美奈ちゃんにウソつくつもりはなかったんだけど……。

美奈　そんなのは、べつに、いいけど。でも、なんで？

小山　え？

美奈　会社で何か、あったの？

小山　……べつに、何もないよ。

美奈　何か大きな失敗でもやらかした？

小山　だから、そんなんじゃないってば。

美奈　じゃあ、何よ？

小山　ほんと、何でもないんだって。

美奈　何でもないことないっしょ！　二日続けて無断欠勤しておいて。

小山 二日じゃないって！ 今朝は、ちゃんと電話したんだから。  
美奈 ……。で、なんだって？  
小山 え？  
美奈 課長さん、電話で、なんて言ってたの？  
小山 ああ。まあ、フツーに……。  
美奈 普通？  
小山 「お大事に」って。  
美奈 ……。とにかくすぐ東京帰った方がいいよ。仮病はともかく、寮にもいないなんてことがバレたらオオゴトだよ？  
小山 いいんだよ、もう。  
美奈 いい、って？  
小山 あんな会社、もう戻るつもりも、ねえし。  
美奈 何、バカなこと言ってるの！？  
小山 いいんだって。見切りつけるなら早いほうが……。  
美奈 見切りつけるも何も、たった三年やそこらで、何がわかるっていうのよ？  
小山 わかるよ、だいたい、三年もいれば。  
美奈 だいいち、もったいないよ！  
小山 もったいない？  
美奈 そうよ、もったいない。入ろうと思って入れる会社じゃないじゃない。小山くん、贅沢すぎ



るよ。あたしが代わってもらいたいくらいだよ。  
パラノだな。

小山  
美奈

何？

小山  
美奈

パラノイア。美奈ちゃん、保守的すぎるんだよ。

……。

小山  
美奈

とにかく、もう決めたことだから。

小山  
美奈

辞めて、どうすんのよ？ どうやって食べてくつもり？

小山  
美奈

食ってくくらい、何したって食ってけるさ。

小山  
美奈

甘いよ！

小山  
美奈

え？

小山  
美奈

もう、そういう時代じゃないんだよ？ 小山くん、何か勘違いしてない？

小山  
美奈

勘違い？

小山  
美奈

今の会社、入れたのだから、べつに小山くんの何かが特別優れてたからってわけじゃないん

小山  
美奈

だよ？ バブルよ、バブル！

小山  
美奈

そんなこと、いわれなくても、わかってるよ。

小山  
美奈

わかってるなら……。

そのとき、後藤がコンビニの袋を提げて現れる。

後藤 ただいま。  
美奈 ちよつと、マークンからも何か言っつてやっつてよ！  
後藤 え？  
美奈 小山くん、会社、辞めるって……。  
後藤 ああ……。ていうか、おまえ、時間いいの？  
美奈 え？  
後藤 午後からゼミって言っつてなかつた？  
美奈 (腕時計に目をやり) ……あ。

美奈、鞆を手に取り、立ち上がる。

美奈 じゃ、行くけど。  
後藤 うん。  
美奈 (小山に) いい？ 今日じゆうに東京帰るのよ？ わかつた？  
小山 ……。  
美奈 たく……。

美奈、ぶつぶつ言いながら、去る。

後藤 怒られてやんの。

小山 うるせえ。

後藤 ほれ。(と、袋を)

小山 何？

後藤 歯ブラシ、なかったろ。顔、洗って来い。

小山 ああ……。

と、電話の呼び出し音が鳴る。

後藤 (受話器を取り) はい。後藤です。……そうですが……、あ！ 先日は、どうも……。はい

……はい……そうですか！ ええ、それは、もちろん。……え、明日ですか？ あ、や……、

ちよつとお待ちください。(受話器を手で押さえ) 小山。ちよつと、手帳、取つて。

小山 何？

後藤 手帳。

小山 手帳？

後藤 それ。

小山 ああ……。

小山、カラーボックスから手帳を取ってきて、後藤に渡す。

後藤 (ページをめくり) もしもし。……はい、大丈夫です。いえいえ、ぜんぜん。こちらこそ、よろしくお願いします。はい。では、明日。失礼します……。 (電話を切る。溜息)

小山 何？

後藤 明日、何があんの？

小山 べつに。

後藤 また隠す！

小山 うるせえな。面接だよ。

後藤 面接？

小山 ああ。

後藤 面接って、何の？

小山 ソフトハウス。

後藤 ソフトハウス？

小山 ゼミの先輩が拓銀に勤めててさ。関連会社のソフトハウスで中途採用の募集があるから受けてみないかって声かけてくれて……。 (電話を切る。溜息)

小山 就職、するってこと？

後藤 面接、通ればだけどな。

小山 ……。

後藤 俺も、いつまでも倉庫でバイトってわけにもいかねえし。今ならまだ、新卒扱いになるって  
いうし……。

小山 ソフトハウスで何するんだよ？

後藤 何って？

小山 職種。まさか、プログラマーとかじゃねえだろうな？

後藤 なんだよ？ まさかって。

小山 だって、おまえ、ろくにワープロだって使えなかったじゃん。

後藤 卒業してもう三年も経つんだぞ。いつまでも学生時代のままじゃねえよ。

小山 映画はどうすんだよ？

後藤 ……。俺が何しようよ、おまえに関係ねえだろ。

後藤、手帳をしまふ。

雨の音。

小山 ……。海にロケ、行っただろ？

後藤 あ？

小山 三年前、ちようど今くらいの季節。灯台のある海で、美奈ちゃんのスカートが風にはためく

シーン、撮影しただろ？

後藤 ……。

小山 したんだよ。けど、なかなか思うような風が吹いてくれなくて、俺、一日中カメラ構えて待

つてたんだよ、おまえが納得する風が吹くのを。どうしてだと思っ

後藤 どうしてって？

小山 どうして俺、あのとき文句も言わず、やれたんだと思う？

後藤 ……。

小山 おまえは、他のやつらとは違<sup>い</sup>、って思ってたからだよ。

後藤 あんまり買い被るなよ。

小山 過去形で言ったんだよ。

後藤 ……。

小山 顔、洗ってくるわ。

小山、コンビニ袋を手に取り、去る。

後藤、窓の外に目をやる。

雨音、高鳴る。

溶暗。

4【2015年2月】

雨音が止む。

昼。

ソファに千夏。

少し離れたところに綾子。

ストーブに火が入っている。

真由美が湯飲み茶碗にお茶をいれ、卓袱台に置く。

真由美 どうぞ。(と、湯飲み茶碗を置く)

千夏 どうも……。

真由美 暑くありません？

千夏 え？

真由美 ストーブ。

千夏 ああ。大丈夫です。

真由美 そうですか？

綾子 ……。

ぎこちない間。

千夏 真由美さん……。

真由美 はい？

千夏 でしたよね？

真由美 あ、はい……。

千夏 よく、似てらっしゃる。とくに、頬の辺り。

真由美 ？

千夏 中村さんと。

真由美 ああ……。

綾子 ……。

真由美 あの、失礼ですけど、父とは、どういう……？

綾子 ああ、暑い！

真由美 ？

綾子 ストープ。

真由美 ……。

綾子、ストープのつまみをいじる。  
と、久美子が茶封筒を手に現れる。



久美子 (綾子に) 何してんの？  
綾子 べつに……。  
久美子 (千夏に) これですか？  
千夏 あ……。 (立ち上がる)

久美子、千夏に茶封筒を渡す。

千夏 すいません。  
久美子 よかった、紛れてなくて。  
千夏 ありがとうございます。  
久美子 あ、座ってください。  
千夏 はい。

久美子、千夏、座る。

久美子 急にこんなことになってしまって……。どこか、べつの出版社を紹介できればいいんですけど……。  
千夏 あ、いえ……。いただきます。

千夏、お茶を飲む。

千夏 出張先で、中村さんのこと聞いて……。

久美子 ええ。

千夏 ほんとは、もつと早くにうかがうつもりだったんですが、なかなか飛行機が取れなくて……。

久美子 突然でしたから。

千夏 ええ。この季節、観光客で……。

綾子 (ぼそりと、しかし聞こえるように) 言い訳がましい。

千夏 ……。

綾子 今頃よく、のこのこ現れたもんですね。頭おかしいんじゃないの？

久美子 綾子！

綾子 ちようど、そこ。今、あなたの座つてるところ。そこで中村くん、倒れてたんですって。

千夏 ……。

綾子 大家さんが発見して、病院に連れてつてくれて。久美子のとくに連絡が来て、駆けつけた時

には、もう……。

千夏 ……。

真由美、久美子にお茶を出す。

真由美 ママ。  
久美子 真由美、どっか行ってなさい。  
真由美 え、何で？  
久美子 いいから！  
真由美 どっか行って？  
久美子 どこでもいいから！  
真由美 ……。

真由美、渋々、去る。

千夏 ……こんなこと言ったら、また、頭おかしいって言われるかもしれませんけど……。

綾子 ……。

千夏 (久美子に) お骨……、中村さんの骨、あたしに引き取らせてもらえませんか？

久美子 ……。

綾子 はあ？ あんた、自分が何言ってるか、わかってんの？！

千夏 非常識だってことは、重々承知してます。

綾子 呆れた。どこまで身勝手な女なの？ 中村くんのこと、久美子から奪っておきながら孤独死

みたいな死に方させて、葬儀にも出てこない。挙句に骨だけよこせって？ ふざけんじやないわよ！

千夏 奪ってなんかいません。

綾子 何？

千夏 あたしと出会ったときには、中村さん、もう、奥様と別居してらして……。

綾子 だから何だっけ言うのよ？！ 久美子、別れてないんだから。法律上では、今でも中村くんのレッキとした「妻」なんだから。

千夏 わかってます。

綾子 わかっててよく言えたわね？ あなた、大学で法律、教えてんでしょ？ 助教授だか准教

久美子 授だか知らないけど、勉強ばっかしすぎて、頭おかしくなっただんじやない？

綾子 よして。

綾子 言っつてやんなきゃわかんないのよ、こういう頭でっかちのバカ女には！

久美子 綾子！

千夏 ……。

綾子 ……コーヒー、飲んでくる。

綾子、去る。

久美子 ごめんなさい。

千夏 いえ……。

久美子 この部屋、昔、大学の同級生が住んでたんです。8ミリ映画の監督。中村が脚本書いて、あ

千夏 たし、撮影の手伝いをしたことがあるんです。聞きました？ 中村から。  
いえ……。

久美子 その壁をスクリーンにして、試写会やったのよ。もう三十年近くも前の話。  
千夏 そうですか……。

やや間。

久美子 出張って、学会か何かで？

千夏 じきに、あたし、ここからいなくなるんです。

久美子 え？

千夏 この春、大学、移ることになったんです。

久美子 ああ……。どちらへ？

千夏 南の方へ。

久美子 南？

千夏 そこに、中村さんを連れていきたい。

久美子 ……。死んだ人は何もしてくれないのよ？

千夏 わかっています。

久美子 いつか、きつと重荷になるのよ？ あなた、背負いきれる？

千夏 そのつもりです。

久美子 あなた、まだ若いんだから、これからいくらでも新しい出会いがあるじゃない。

千夏 そういう問題じゃないんです。

久美子 ……。

千夏 久美子さん。ひとつ、うかがってもいいですか？

久美子 何？

千夏 あたしのこと、憎んでますか？

久美子 え？

千夏 殺したいと思ったことありますか？

久美子 ……何、言いだすの？

千夏 ……。

久美子 やっぱり、あなた勘違いしてる。

千夏 え？

久美子 こういうこと、あなたにとっては特別なことかも知れないけど、あたしにとっては今まで何  
度もあったことなの。中村ってそういう男なのよ。あなたは、そういう女の一人に過ぎない  
の。

千夏 ……。

久美子 あんまり思い上がらないで。

と、そこに津田、現れる。

津田 あのうち……。

久美子・千夏 ！

久美子 びっくりしたあ。なんだ、津田さんか。

津田 あ、すいません。玄関、開いてたもんで……。 (千夏を認め) あ、お客さんですか。

千夏 ……。

津田 ごめんなさい、驚かせちゃって。

千夏 いえ……。

久美子 どうしたんです？

津田 ああ、僕、ケータイ、置き忘れて行ってませんか？

久美子 ケータイ？

津田 ええ。いつも、ここ(ポケット)に入れるんですけど……。

久美子 見てないけど。

津田 おかしいなあ。ちょっと、いいですか？

津田、部屋の隅をあちこち探す。

津田 あれえ？ 僕、さっきここ、座ってましたよね？ ちょっといいですか？

千夏、立たされる。

千夏 あの、あたし、今日のところはこれで……。

千夏、茶封筒を手取る。

千夏 じゃあ、また。

久美子 もう、お目にかかることもないと思うけど。

千夏 ……。

千夏、深く会釈して去る。

久美子 (それを見送り) ……。

津田 どなたですか？

久美子 ……中村と、共通の知り合い。

津田 はあ。……あ！

津田、尻ポケットからスマホを取り出す。



津田 あった。灯台下暗し。ハハハ……。

久美子、窓の外を見ている。

津田 どうかしました？

久美子 ……。

溶暗。

5【1992年6月】

黄昏時。

窓の外、雨はすでに上がっている。  
卓袱台で、美奈が洗濯物をたたんでいる。

美奈 (手を止め、窓の外に目をやる) ……。

立ち上がり、カーテンを閉める。

と、小山がスーパールの袋を手に見れる。

小山 ただいま……。あれ？ 美奈ちゃん。来てたの？

美奈 ……。

小山 学校は？ もう終わり？

美奈 今日じゆうに東京帰るんじゃないの？

小山 それ、美奈ちゃんが言ったんだよ。  
美奈 ……。

小山、袋を卓袱台に置く。

小山 後藤は？

美奈 バイト。

小山 え、もう？

美奈 早番だから。

小山 なんだ。そうならそうと言ってくれればいいのに。弁当、二つ買ってきちゃったよ。

美奈、洗濯物をカラーボックスにしまい、鞆を手取る。

美奈 じゃ、あたし、帰るから。

小山 美奈ちゃん、食わない？

美奈 え？

小山 夕飯、まだでしょ？ 弁当、余らせるのも、あれだから。

美奈 ……。

小山 あ、お茶いれよつか。ウーロン茶……。

美奈 いいよ。やるから。

小山 そ？

美奈、冷蔵庫からウーロン茶を出し、二つのコップに注ぐ。

小山、スーパーの袋から、弁当と風邪薬を取り出す。

美奈、卓袱台にコップを置く。

小山 サンキュ。

美奈 (風邪薬を認め) 何? 風邪ひいたの?

小山 ん? や、一応そういうことになってるからさ。

美奈 え?

小山 罪滅ぼしっていうか。

美奈 どういうこと?

小山 ツジツマあわせておかないと。病は気からともいうし。

美奈 ……ヘンなの。

小山 ま、いいじゃん。食お、食お。いただきますーす。

美奈 ……いただきます…。

二人、弁当を食う。

小山 あ、俺、ちくわ、ダメなんだ。いる?

美奈 いない。

小山 そう…。なんか、ロケ弁、思い出すね。

美奈 え?

小山 ロケ弁。映画のロケ。  
美奈 ああ……。  
小山 「自販機事件」覚えてる？  
美奈 ジハンキジケン？  
小山 ほら、海のロケでさ、自販機のコンセントから照明の電気とってたら、近所の人に通報されちゃったこと、あったじゃん。  
美奈 ……ああ。あったね。(笑う)  
小山 中村がいけないんだよ。あいつが寝坊するもんだから、渋滞に巻き込まれちゃって、それで撮影が夜までかかっちゃったんだよ。  
美奈 そうだった。  
小山 あいつ、いつも肝腎な時に、ポカすんだよな！。  
美奈 ……。(笑う)  
小山 最近、連絡、取ってる？  
美奈 何？  
小山 中村。  
美奈 年賀状が来るくらい。  
小山 今、何してんだろう？ まだ、何か書いたりしてんのかな？ 小説とか。  
美奈 結婚したって。  
小山 結婚？

美奈 うん。  
小山 誰と？  
美奈 久美子って覚えてる？  
小山 クミコ？  
美奈 海のロケで、記録係やった。  
小山 ……ああ、そういえば、なんとなく。いつ？  
美奈 ん？  
小山 結婚したの。  
美奈 ああ。去年。今年の年賀状で、夫婦になったた。  
小山 そう……。でも、やっていけんのかなあ？  
美奈 何が？  
小山 あいつも就職しなかったでしょ？  
美奈 したって。  
小山 え、どこ？  
美奈 出版社。  
小山 出版社？  
美奈 うん。  
小山 東京？  
美奈 地元の小さなとこ。

小山 そうなんだ。

間。

小山 ……美奈ちゃんは、どうなの？

美奈 え？

小山 後藤の事。

美奈 何？

小山 就職決まって、これで一安心して感じ？

美奈 まだ決まったわけじゃないし。

小山 決まったようなもんじゃない。あと、面接だけでしょ？

美奈 その面接が問題なんじゃない。

小山 そっか……。

間。

小山 いつから？

美奈 え？

小山 後藤と、いつから付き合ってるの？もしかして、あの頃から？

美奈 あの時頃？  
小山 だから、海のロケの……。  
美奈 ……。その後だよ。  
小山 そうなんだ。もしかして、他のみんなは、知ってたの？  
美奈 ……。  
小山 そっか。俺だけ、知らなかったってわけか。……なんか、俺、バカみたいだな。  
美奈 ごちそうさま。

美奈、弁当のふたを閉じる。

小山 もう食わないの？  
美奈 おなかいっぱい。  
小山 そう。  
美奈 いくらだった？  
小山 いいよ、そんなの。  
美奈 よくないよ。  
小山 いいって。それより、美奈ちゃん、この後、何か、ある？  
美奈 え？  
小山 昔、よく行った居酒屋あるじゃん？ ほら、川沿いの、ビルの地下の。あそこに、「映研」



美奈 の名前で焼酎のボトルルキープしてあるんだよ。ちよつと行ってみない？  
いつの話よ？

小山 だから、これから。

美奈 そうじゃなくて。三年前のボトルなんて、もう、あるわけないっしょ？

小山 そんなの、わかんないじゃん。

美奈 わかるよ。

小山 とにかく、行くだけ、行ってみようよ。奢るからさ。

美奈 悪いけど、今週中に仕上げなきゃいけないレポートがあるから。

小山 ホンの小一時間。

美奈 また、今度。

美奈、食べ残しの弁当を冷蔵庫にしまおう。

小山 今度って？

美奈 え？

小山 帰れって言ったり、今度って言ったり。

美奈 ……。

小山 ねえ、いつなの？ 今度って。

小山、美奈の手を掴む。

美奈　?! ……何?

美奈、掴まれた手を引く。  
と、小山、力任せに引き寄せる。

美奈　ちよつ、何……!

抵抗する美奈。

小山、美奈の唇を奪おうとする。

美奈　やめて!

二人、激しく揉み合う。

美奈、鞆で小山の頭をたたき、突き放す。

小山、無様に床に尻餅をつく。

美奈 小山くん、そういう人だと思わなかった。

美奈、去る。

小山 ……。

小山、残りの弁当を食う。  
食べ残しを冷蔵庫にしまう。  
卓袱台の上の風邪薬の箱。  
それを手に取り、玄関の方に投げつける。  
自己嫌悪に頭を抱える。  
溶暗。

6【2015年2月】

午後。

久美子が卓袱台でアルバムを眺めている。

真由美がピザ屋のチラシを手に、ケータイで電話している。

真由美（電話に）Lサイズっていうのは、何人前ですか？ ……三人前？ じゃあ、それを二枚と  
……。

久美子（顔を上げ）一枚で十分よ。三人しかいないんだから。

真由美 あたしが四人前食べんの。

久美子 ……。

真由美（電話に）えー、あとサラダを一つ。 ……シーザーサラダ。はい。え？ 飲み物？ ママ。

久美子 さん？

真由美 飲み物、コーラでいい？

久美子 うん。

真由美 コカ？

久美子 コカ？

真由美 それともペプシ？

久美子 ……コカ。

真由美 (電話に) じゃ、コカコーラを三つ。以上です。……そうですね。ガソリンスタンドの裏の……ええ。そのアパートの二階、一番奥の部屋。あ、いえ、表札は「中村」ってなってますけど。……そうですね、わかりました。はい。じゃ、お願いしまーす。(電話を切る) ……雪でちよっと時間かかるかもしれないって。

久美子 そう。

真由美 写真？ ね、見して見して。(と、アルバムを奪う)

久美子 ちよっとお、ママ、見てるんだから。

真由美 え、もしかして、これって、ママ？

久美子 そうよ。

真由美 マジ、超ウケるんですけど！

久美子 何がよ？

真由美 だって、若い。

久美子 当たり前でしょ。大学生なんだから。

真由美 ママにも「青春」があったんだねえ。

久美子 そりゃ、あったわよ。

真由美 これって、パパが撮ったの？

久美子 そうよ。

真由美 ヒューヒュー。(と、冷やかす)

久美子 バカじゃないの？

真由美 照れることないじゃない。海でデートなんて「青春」て感じ。  
久美子 撮影よ。

真由美 サツエー？

久美子 8ミリ映画のロケ。

真由美 ああ。

と、綾子、戻ってくる。

綾子 ただいまあ……。

久美子 あ、おかえり。

綾子 (部屋の中を見回し) ……帰った？

久美子 え？

綾子 あの女。

久美子 ああ、うん……。どこ行ってたの？

綾子 その喫茶店。

久美子 そう。

綾子 あーお腹すいた。何か食べればよかった。

久美子 今、ピザ頼んだから。

綾子 そう。(真由美に) 何、写真？

真由美 あ、うん。ママ、大学生だって。

綾子 見して見して。……え、もしかしてこれ、久美子？

久美子 そうよ。

綾子 マジ?!

久美子 何よ？

綾子 そっかあ。あたしも年取るわけだわ。

久美子 ……。

そのとき、真由美のケータイが鳴る。

真由美 あ……。 (ケータイを見て) ちょっと、あたし、出てくる。

久美子 どこ行くの？

真由美 ちよっと。

久美子 誰？

真由美 秘密。

久美子 え？

真由美 いろいろ、あんのよ。「青春」だから。

久美子 ピザ、来るわよ？

真由美 すぐ、戻る。

真由美、去る。

久美子 たく……。

綾子 ごめんね。

久美子 え？

綾子 さつきは、つい、カツとなっちゃって……。

久美子 ああ、ううん。でも、驚いた。綾子らしくない。

綾子 ……。

久美子 どうかしたの？

綾子 ……。(無理にはほえむ)あの人と、うまくいってないんだ。

久美子 え、金井さん？

綾子 うん。

久美子 何？

綾子 女がいるのよ。

久美子 女？

綾子 若い女。金井、単身赴任してるって言ったでしょう？ マンションで鉢合せしちゃった。

久美子 ……。

綾子 まったく、男ってやつは、どいつも、こいつも。ねえ？



綾子、再びアルバムに目を落とす。

綾子 (ページをめくり) 灯台……？

久美子 あ、うん、映画のロケの。

綾子 ああ。……中村くんの処女作って、久美子、観た？

久美子 え？

綾子 中村くんがはじめて脚本書いた映画。三年生の時だったかな。駅裏の倉庫で上映したやつ。

久美子 ああ、ううん。

綾子 そう。

久美子 綾子は観たの？

綾子 観たよ。中村くと二人で。

久美子 え？

綾子 ほんとは、久美子も一緒に行くはずだったの。三人で行こうって、ゼミの後、中村くんが声

かけてくれて。でも、あたし、そのこと、久美子に黙ってた。

久美子 ……。

綾子 聞いてない？ 中村くんから。

久美子 ううん。

綾子 そう。もう、時効だよね？

久美子 ……その灯台の明かり、ここまで届くのよ。

綾子 灯台？

久美子 うん。

綾子 この部屋に？

久美子 うん。

綾子 嘘お。

久美子 ほんとよ。ここで映画の試写会やったとき、窓に、ふわって光がよぎって……。

綾子 車のライトかなんかでしよう？

久美子 あたしもそう思ったの。けど、中村が、そう言うんだもの。

綾子 ……ふうん。

久美子 どんな映画だったの？

綾子 何？

久美子 中村の処女作って。

綾子 ああ。どんなだったかな……。そうそう、主人公の男が船で海に出ようとするのよ。

久美子 うん。

綾子 港で帆を張って、風が吹くのを待つ。だけど、いつまで待っても風は吹かなくて……。そのとき、男は船陰に少女の姿を見つけるの。

久美子 少女？

綾子 うん。男は彼女の後を追いかけるんだけど、近づけば近づくほど遠ざかって、追いつくこと

ができないの。そのうちに、百年だか千年だかの月日が経って、船も港も、男も、すべて砂になってしまうの。そこで、少女がはじめて後ろを振り返って……、そこまで。

久美子 え？

綾子 そこでフィルムが映写機に絡まっちゃって。

久美子 ああ。

綾子 だから、いまだに結末が、わからないままなんだ。

久美子 でも、なんで？

綾子 ん？

久美子 中村本人に聞いたらよかったじゃない。

綾子 いいのよ。

久美子 どうして？

綾子 あたしなりにラストは完結してるから。

久美子 え、どんな？

綾子 風が吹くのよ。

久美子 風？

綾子 そうして砂を吹き飛ばして、何もかも、全部消えてなくなってしまうの。

久美子 ……少女も？

綾子 ……。

綾子、答えず、再びアルバムに目を落とす。  
久美子、そんな綾子を見つめている。  
溶暗。

7【1989年6月4日（日）】

朝。

卓袱台で、大学生の小山が、地図を広げている。  
傍らで、大学生の後藤がマクドナルドのポテトを食べている。

小山 まあ、手っ取り早いのは「高速」に乗っちゃうパターンだな。それだと、（目的地まで45

分）だって。あー、でも高速代、結構するなあ。やっぱ下道で行くか。

後藤 （食べながら）……。

小山 や、待って待って。今日、日曜か。日曜って、やっぱ、渋滞すんのかな？ 昼までには着いてお

きたいし……。なあ。

後藤 ……。

小山 後藤、聞いている？ （地図を丸めて拡声器にし）聞こえていますかー！

後藤 聞いているよ。

小山 聞いているなら返事くらいしろよ。

後藤 つか、おまえって、ほんと決められない人だよなあ。

小山 あ？

後藤 学食でもいっつもそうじゃん。AランチかBランチかで一時間くらい迷うだろ。

小山 ……んな、迷うかよ。昼休み終わっちゃうじゃん。

後藤 しかし、他のみんな、遅いな。  
小山 ああ。

後藤 道に迷ってんのかな？

小山 まさか今日からクランクインでこと、忘れてるとか？

後藤 いや、それはないよ。少なくとも倉林さんは。

小山 え、なんで？

後藤 ゆうべ、電話で話したから。

小山 美奈ちゃん？

後藤 うん。

小山 へえ……。あ、それで、おまえ、ゆうべ、ずっと話し中だったんだ？

後藤 え？

小山 俺、一時過ぎまで粘ったんだよ。スケジュールのことでさ。珍しいなと思ったんだ。後藤が

長電話するなんて。

後藤 べつに珍しくもないだろ。

小山 珍しいよ。

後藤 珍しくないって。

小山 おまえ、電話、嫌いじゃん。

後藤 んなことねえよ。

小山 だって、いつも俺の電話、すぐ切るじゃん。

後藤 そりゃ、相手が、おまえだからだろ。  
小山 ……。  
後藤 で、何？  
小山 ん？  
後藤 スケジュールのことって？  
小山 ああ。来月。  
後藤 来月。  
小山 二週目の日曜。  
後藤 二週目の日曜。  
小山 俺、NG。  
後藤 小山、NG…マジかよ？！  
小山 悪い。  
後藤 何で？  
小山 面接なんだよ。  
後藤 面接？  
小山 リクルーター。  
後藤 え、もう、就職活動してんの？  
小山 もうって、おまえ、とっくだよ。金融なんか、ほとんど決まっちゃってる。  
後藤 そうなんだ…。で、おまえは？

小山 俺は、メーカーだから。  
後藤 ああ、こないだ、言ってたやつ？  
小山 そう。  
後藤 面接か。じゃあ、まあ、しょうがねえな。

後藤、手帳を取り出し、スケジュールに「×」をつける。

後藤 小山、NGと……。  
小山 おまえは、どうすんの？  
後藤 何？  
小山 就職活動、マジで、しないの？  
後藤 興味ねえもん。  
小山 興味なんか、俺だって、ねえよ。  
後藤 俺は、今のこれ、続けてくつもりだし。  
小山 8ミリ映画で、どうやって食ってくんだよ？  
後藤 食ってくくらい、何したって食っていけるさ。  
小山 ……。

と、玄関のドアをノックする音。



後藤 あ、来た。どうぞー。開いてますよー。

花柄のサマードレスを着た、大学生の美奈が現れる。

美奈 おじやまします。あ、小山くん、おはよう。

小山 おはよう……。

美奈 (後藤に) おはようございます。すいません、遅くなりまして……。

後藤 あ、いえ……。

美奈 ゆうべ、お話したサマードレス、これなんですけど……。

後藤 ああ。

美奈 どうでしょう……？

後藤 うん。いいんじゃないですか？ いい感じですよ。(小山に) なあ？

小山 ん？ ああ、うん。

美奈 よかった。イメージと違うっていわれたらどうしようかと思った。……今日、これだけですか？

後藤 いや。あと、中村と、中村の知り合いの女の子。

美奈 はあ。

小山 記録係、やってもらおうことになってて。

美奈 ああ、そうなんだ。

後藤 ま、座ってください。

美奈 あ、はい。

後藤 小山。ちよっと、中村んとこ、電話してみろよ。

小山 なんで？

後藤 あんまり遅くなっても、あれだし。

小山 いや、なんで、俺なんだよ？

後藤 え？

小山 自分でしろよ。電話、好きだろ？

後藤 ……。

美奈 ？

後藤、固定電話で電話する。

後藤

……あ、もしもし。中村？ おまえ、何やってんの？ 今日から撮影だぞ。……寝てたあ？  
……ああ、いいいいいよ。車で拾いに行くから。あ、記録係の女の子、おまえから連絡しと  
けよ。待ってんだろうからさ。ああ、おまえは、そこで待ってろ。じゃあな。(電話を切る)  
たく、あいつは、いつも肝腎な時に……。

と、カメラの回る音。

後藤 (その音に振り返り) ……。

小山が、美奈に8ミリカメラを向けている。

後藤 バカ、何やってんだよ！ フィルムの無駄づかいすんじゃないやねえよ！

小山 空回しだよ。

後藤 あ？

小山 まだ、フィルム、入ってないって。

後藤 ……なんだ。脅かすなよ。

小山 (美奈に) ケチでしょう？ ……さて、と。じゃ、俺、駐車場から車、出してきたやうわ。

後藤 ああ。頼むわ。

小山、去る。

後藤 (ポテトを) 食べます？

美奈 いえ、大丈夫です。

後藤 あ、なんか飲みます？

美奈 どうぞ、おかまいなく。  
後藤 つていつても、インスタントコーヒーくらいしかないんですけど……。  
美奈 あ、じゃあ。

後藤、コーヒーを入れる。

間。

美奈、部屋を見回している。

後藤 砂糖とミルクは？

美奈 ああ……。

後藤 クリープしかないですけど。

美奈 はい。

後藤 あ、マリームだ。マリームしか、ないですけど。

美奈 ……マリームで。

後藤 (コーヒーをいれながら) すいませんね。急なお願いで。

美奈 あ、いえ。

後藤 大丈夫ですか？

美奈 はい？

後藤 就職活動とか。

美奈 ああ。あたし、大学院に進学するので。  
後藤 ああ、そうなんですか。どうぞ。

後藤、カップを置く。

美奈 どうも。(カップを手に取り) 試験勉強に集中するためにバイト辞めたら、却って調子狂っちゃって。だから、ちやうどよかったんです。いい気晴らしになって。

後藤 気晴らし……。

美奈 はい。いただきます。

後藤 気晴らし……。

美奈 ……あ、いえ、気晴らしって、べつに、そういう軽い気持ちであれしたわけじゃなくて……。  
後藤 え？ あ、いや……。そうだ。

後藤、缶の中からフィルムの切れ端を取ってくる。

後藤 これ。(と、手を伸ばす)  
美奈 ?

美奈、手のひらを出す。  
その上に、後藤、フィルムの切れ端を置く。

後藤 8ミリ映画が1コマ1／18秒って話、聞いたことありますか？  
美奈 いえ。

後藤 つまり1秒18コマ。1分が、かける×60で、1080コマ。今回、15分の短編だから、さらに×15で、16200コマ。まあ、実際にはもっと長い時間、回して、後で編集するんですけど。

美奈 編集って、ここで、ですか？

後藤 そう。

美奈 後藤さん、一人で？

後藤 うん。

美奈 たいへん……。

後藤 好きでやってることだから。(と、美奈のコーヒーを飲む)

美奈 あ、それ、あたしの……。

後藤 え？ あ……。

美奈、フィルムの破片を落としてしまう。

美奈 やだ。ごめんなさい。

美奈、床にフィルムを探す。

後藤 あ、いいですよ。

美奈 え？

後藤 カットして、いらなくなった切れ端だから。

美奈 ……ほんとですか？

後藤 ほんとほんと。

美奈 よかった……。

後藤 (窓の外に目をやり) なんか風、出てきたな。雨、大丈夫かな？

後藤、テレビをつける。

マクドナルドのポテトを手取る。

ニュースが流れる。

銃声。

レポーターの声

〈千以上の兵士が天安門まで威嚇射撃を激しく繰り返しながら進行しました。睨み合いが続く中、突然一人の学生が火炎瓶を持って軍めがけて歩き出しました。他の市民が「やめろ、戻れ」と叫ぶ中、その学生は一步一步軍に近づき、十メ

トトルも行ったところで突然、軍の発砲に遭い、火炎瓶を持った右手を撃たれ、瓶は鈍い音を立て学生足元で割れました。

銃声。

群衆の声。

レポーターの声

〈天安門の付近から銃声が聞こえます。私の周りを囲む市民の中から怪我人が出ました。腹を撃ち抜かれた学生もいます。それから、女子学生も怪我をしています。私は四人、怪我人を見ました。一人は意識がありません……〉

そこで音声は途切れ、突然、CMに切り替わる。二人、無言で画面を見つめている。

後藤・美奈  
……。

そのとき、小山が現れる。



小山 準備いいか？  
後藤 ん？ ああ。

小山、カメラを手に取る。  
後藤、テレビを切る。

後藤 じゃ、行きましようか。  
美奈 あ、はい……。 (しかし動かない)  
小山 美奈ちゃん。  
美奈 ん？ んん……。

三人、去る。  
ゆっくりと、溶暗。  
その間、後藤と小山の話し声。

後藤 (声) 決めた？  
小山 (声) 何？  
後藤 (声) 高速か、下道か。  
小山 (声) 下道。

後藤

(声) やっぱりな。

完全な闇。

カタカタと映写機の回る音。

音楽。

壁に、古ぼけた8ミリ映画が映写される。

女、大学、アルバム、海、灯台、風にはためくスカート……。

8【1992年6月】

朝。8ミリ映画の映写が終わり、舞台の照明が変わる。

ワイシャツ姿の後藤がコップを手に、歯を磨きながら、現れる。やがて、小山、洗面用具を手に現れる。

小山 ただいま。

後藤 (歯ブラシを口に入れたまま) おー、はやはっは、あー。  
小山 何？

後藤、コップの水で口をゆすぐ。

後藤 早かったな。

小山 100円で5分だもん。

後藤 うん。

小山 これ。(と、シャンプーを)

後藤 そこら、テキトーに置いといて。

小山 何時に出んの？

後藤 ん？  
小山 面接。  
後藤 昼前に出りやじゆうぶんだろ。  
小山 そう。

後藤、シャンプーをしまう。

小山 つか、冬場、どうしてんの？  
後藤 ん？  
小山 頭洗って帰ってきたら、髪の毛、凍っちゃうだろ。  
後藤 美奈のアパートで、風呂、借りてるから。  
小山 え？ ああ……。今日、美奈ちゃんは？  
後藤 昨日、来たばつかじゃん。そう毎日、来ねえよ。  
小山 そうなんだ。  
後藤 なんで？  
小山 ん？  
後藤 美奈に、何か、用？  
小山 や、べつに……。  
後藤 つか、おまえは、いつまで、いるつもりだよ？

小山 まあ、もう、しばらく。

後藤 しばらくって？

小山 まだ、ドラクエ、終わってねえし。

後藤 終わるまでいるつもりかよ！

小山 そう、邪魔にすんなって。

後藤 たく……。

やや間。

小山 俺さ、この三年間、無遅刻無欠勤だったんだよ。

後藤 あ？

小山 異動してからも、とりたてて大きなミスもなく。だから課長にも、わりとデキる部下って思われてんのね。

後藤 自慢かよ。

小山 そうじゃねえよ。だって、そんなのウソだもん。虚像、ハリボテ。とりたてて何か特別優れてるってわけじゃないし。なんとか誤魔化してギリギリ取り繕ってんの。

後藤 ……。

小山 メッキが剥がれるのも時間の問題。

後藤 剥がれる前に、自分からゲームを降りようってわけか。

小山 ……。あーあ。「革命」起こしたかったなあ。おまえなら起こせるんじゃないかって、俺、結構、マジで思ってたんだよ。

後藤 もう、いいよ、その話は。

小山 ここで映画の試写会したじゃんか。その壁をスクリーンにして。あれ、もう一度やりたいな。

後藤 無理だよ。

小山 どうして？ フィルムは、後藤が持ってたんだろ？

後藤 映写機がねえもん。

小山 え、どしたの？

後藤 売った。

小山 売った？

後藤 ああ。

小山 いつ？

後藤 とつくの昔。

小山 だってあれ、映研の持ち物にしてただろう？

後藤 もう、フィルムの時代じゃないからって、映研から返されて。

小山 ふざけんなよ！ あれ、買ったの、俺だぞ？ バイト代、三か月分もつぎ込んで……。

後藤 ベルトの交換は、俺がしただろ？

小山 ベルトの交換だけじゃんか。

後藤 男のくせに、いちいちこまけーこと言うなよ。さつきシャンプー貸してやっただろ？  
小山 ……。たく、なんだよ……。

やや間。

後藤 まあ、小山。

小山 あ？

後藤 おまえ、自分で映画撮ろうと思ったこと、ないの？

小山 え？

後藤 自分で監督しようって。

小山 なんだよ、急に？ ないよ。んなこと、思うわけないじゃん。

後藤 なんで？

小山 なんでって……、そんな才能、ねえもん。

後藤 んなの、やってみなきゃ、わかんねえだろ。

小山 わかるよ。

後藤 だから、なんでだよ？

小山 わかるよ、自分のことだもん。

後藤 自分のことだから、わかんねえんじゃないん。

小山 ……。

後藤 おまえ、あのシーン、どう思ってる？

小山 何？

後藤 海のシーン。

小山 海のシーン？

後藤 うん。

小山 海のシーンが何だよ？

後藤 率直なところ、あれで、よかったと思う？

小山 どういうこと？

後藤 あの灯台、要らなかったんじゃないかって気がする。

小山 え？

後藤 ……。

小山 今さら、言うかな、そういうこと。

後藤 今、思えば、ってことだよ。

小山 だって、おまえがOKしたんだぞ？

後藤 そうだよ。

小山 そうだよって…。じゃ、何？ 俺らのしたことは、ムダだったってこと？

後藤 そう思いたくないから、ってことなんじゃないか？

小山 何？

後藤 無駄だって思いたくないから、切るべきところを、切れずにいただけなんじゃないかって…



…。

小山 ……。そうかな？ 俺は、あれ、あつていいと思うけど。

後藤 そうか。

小山 そりゃ、そうだろ。ていうか、なきやダメだよ。

後藤 ……そうだな。たぶん、おまえの意見が正しいよ。やっぱ、俺、監督失格だ。

小山 ……。

後藤 さて、と。俺もシャワー浴びてくるわ。

後藤、去る。

と、シャンプーが置き忘れてある。

小山 あ……。

小山、シャンプーを手に取り、後藤の後を追いかける。

小山 おい、後藤、忘れ物。(去る)

誰もいない部屋……。

9 【2015年3月】

朝。

物音。

津田 (声) あ痛たた……。

真由美 (声) 大丈夫ですか？ 気をつけてくださいね。雪で階段すべりやすくなってますから。

津田と真由美が現れる。

津田 よし、と。これで全部かな？

真由美 と、思います。

津田 あ。トイレは……？

真由美 やつとききました。

津田 そう。

真由美 一応、ママに連絡しとこ。

津田 うん。

真由美、ケータイで電話する。

真由美 (電話に) ……あ、ママ。今、「水抜き」、終わった。うん、トイレも。他に、ないよね？ ……え？ いるよ？ (津田に目をやる) 替わろっか？ ……津田さん。(と、電話を)

津田 (受け取り) もしもし。

真由美、水道の水で手を洗おうとする。  
蛇口を捻るが水は出ない。

真由美 あ、そっか。(戻ってくる)

津田 (電話に) あ、いえいえ。で、今日、何時からですか？ (腕時計を見て) ……そうですか。ギリギリ間に合うか、どうか…。ええ。とりあえず、今からそっち、向かいますから。はい。

真由美 (受け取り) もしもし。

津田、水道の水で手を洗おうとする。  
蛇口を捻るが水は出ない。

津田 あ、そっか。

真由美 ……わかってるって。言われなくても鍵くらい、かけていきますってば。……はいはい、はい。したっけ。(電話を切る) まったく、いつまでも子供扱いなんだから……。

津田、窓の外に目をやる。

津田 大丈夫かなあ？

真由美 え？

津田 雪。

真由美 ああ。天気予報では夜まで降らないって言ってましたけど。

津田 そう。

真由美 そういえば津田さん、雪の晩に、家に泊まったこと、あったでしょう？

津田 俺？

真由美 覚えてません？

津田 いつ？

真由美 昔。あたしがまだ小学生だった頃。パパと二人で、どつかで飲んで、吹雪で汽車、動かないから……。

津田 ……ああ。そういえば。よく覚えてるね、そんなこと。

真由美 襖越しに、布団の中で、パパと津田さんが話してるのを聞いてたの。

津田 何、話してた？

真由美　そこまで覚えてないけど。

津田　だよね。

真由美　でも、ヘンな夢見たのを覚えてる。

津田　夢？

真由美　うん。

津田　どんな？

真由美　あたしがパパと二人で船に乗ってるの。

津田　船？

真由美　そう。わりと大きな帆船。で、どういうわけだか、海の上を大勢の人が歩いてるの。こつちを見て、何かひそひそ話しながら通り過ぎてくのね。あたし、恥ずかしくて、パパに助けを求めようとするんだけど、パパは一人で船を降りて、海の上を歩いて行ってしまふの。裏切られたって思ってる、シヨックだった。

津田　……あ、そうだ。あの晩だ。

真由美　え？

津田　中村さんから、会社辞めて独立するって話、聞いたの。

真由美　ああ……。

津田　実は俺、誘われたんだよね。一緒に新しい会社やらないかって。俺、少し考えさせて欲しいって言っただけ、そのままずると答えを出さないまま……。中村さんも、「裏切られた」って思ってたかな？　ハハハ……。

真由美 ……。

真由美、突然、両手を顔に当てる。

津田 真由美ちゃん……？

真由美、嗚咽する。

津田 ……。

真由美、ソファでひとしきり泣く。

津田、それを離れたところで見ている。

と、部屋の入り口で物音がする。

津田 (振り返り) ?!

千夏が旅行鞆を提げ、部屋の入口に立っている。

津田 おー！ びっくりしたあ……。

千夏 ごめんなさい。玄関、開いてたもんで……。

津田 あなた、こないだの……。

真由美 ……。(顔を上げる)

千夏 (真由美に) こんにちは。

真由美 こんにちは……。

津田 どうしたんです？

千夏 ……今日、久美子さんは……？

津田 え？ ああ、今、実家に。

千夏 実家？

津田 中村さんの、四十九日で。

千夏 ああ……、そうですか……。

津田 真由美ちゃん、先に汽車で行ってなよ。納骨式、はじまつちゃう。

真由美 あ、はい。

千夏 ……。

真由美 じゃ、これ。(と、アパートの鍵を) 戸締まり、お願いします。

津田 ああ。(受け取り)

真由美、千夏に会釈して、去る。

千夏 (会釈を返し) ……。

津田 僕も、そんなに、ゆっくりはしてられないんですけど。

千夏 すいません、お忙しいところ……。

津田 あ、いや。ま、どうぞ、座ってください。お茶でも……、って、さっき「水抜き」しちゃったんだ……。

千夏 どうぞおかまいなく。

津田 あ、寒くありません？ ストーブ、つけましょうか。

津田、ストーブをいじる。

津田 あれ？ 灯油、切れてんのかな……？

千夏、封筒を取り出す。

千夏 すいませんが、久美子さんに……、中村さんの奥様に、渡していただけますか？

津田 何です？

千夏 ……渡していただければ、わかりますので。

津田 はあ。……あのう、失礼ですが、中村さんとは、どういう……？

千夏 ……。



津田 や、久美子さんと共通の知り合いだつて、聞いたもんで……。  
千夏 これ。

千夏、津田に名刺を渡す。

津田 あ、どうも。……大学の先生、ですか？

千夏 本を出していただくことになってたんです。

津田 え？

千夏 中村さんのところから、研究書を。

津田 ああ……。あ。申し遅れまして。僕、津田、といいます。

津田、千夏に名刺を渡す。

津田 昔、中村さんも、ここに勤めてたんです。

千夏 え？

津田 僕の上司だったんですよ。中村さん。

千夏 ああ……。そうなんですか。

津田 独立して、倉庫として、このアパートを借りたらしいんです。まあ、いろいろあつて、最近

は、ほとんど住んでたみたいですけど。(と、千夏の顔を凝視する)

千夏

津田

千夏

津田

千夏

津田

千夏

津田

千夏

津田

千夏

津田

千夏

津田

千夏

津田

千夏

……。

……そういうことか。

……。

しかしこんな風呂なしアパート、今どき、学生だって借りませんよね。築何年なんだろう。もー、水抜きするのも一苦勞ですよ。水抜き栓、外にあるから錆びちやっつて。ほら。(手が) 真っ赤。参っちゃいますよ。ハハハ……。

灯台の明かりが見えるんです。

え？

窓から、灯台の明かりが。遮る物が、何もないから。

はあ、そうなんですか。

津田さんにとって、どんな人でした？

？

中村さん。

……。

いい上司でした？

ええ、そりゃ、まあ。

よかった。

千夏、腕時計に目をやる。

千夏 じゃあ、あたし、そろそろ……。 (と、旅行鞆を手取る)

津田 あ、どちらに？

千夏 え？

津田 もし駅なら、車で、お送りしますよ。

千夏 ……いえ。自分の足で行きますから。

千夏、礼をして、去る。

津田 (礼を返し) ……。

津田、封筒の中身を取り出す。

鍵である。

それを見つめる。

溶暗。

10【1992年6月】

夜。

美奈、現れる。

卓袱台の上に、風邪薬が置かれてあるのを認める。

風邪薬の下に、メモ。

美奈、メモを手に取り、黙読する。

美奈  
……。

と、スーツ姿の後藤、現れる。

後藤  
ただいま。

美奈  
(振り返り) あ、おかえり。マークン、これ。

後藤  
ん？

美奈  
小山くんの……。

後藤  
……。

美奈、後藤にメモを渡す。

後藤 (読んで) ……あいつ、帰ったのか。

美奈 うん。

後藤 ドラクエ、終わってないのに。

美奈 え？

後藤 せっかく来たんだから、メシくらい、一緒に行けばよかったな。小山の経費で落としてさ。……。小山くん、ほんとに会社辞めちゃうつもりなのかな？

後藤 さあ、どうだか。案外、これがいい気晴らしになつて、むしろ長続きしたりすんじゃない？

(と、メモを)

美奈 (受け取り) だといけど……。

後藤 何、これ？ (と、風邪薬を)

美奈 ？

後藤 風邪ひいたの？

美奈 ああ、ううん。小山くんのツジツマ。

後藤 ツジツマ？

美奈 それより、マークくん、面接、どうだったの？

後藤 ああ、まあ、可もなく不可もなくって感じ。

後藤、スーツの上着を脱ぎ、壁のフックに掛ける。

美奈 結果は、いつ？

後藤 一週間以内に文書で通知だって。

美奈 そう。

後藤 俺も本格的に、プログラムの勉強しないと。

美奈 ……マークくんは、どうなの？

後藤 何？

美奈 いいの？ これで、本当に。

後藤 何がだよ？

美奈 後になって、やっぱり違うとか、言い出さない？

後藤 ……そんなの、そのときになってみなけりや、わかんないだろ？

後藤、カラーボックスからフィルム缶を取り出す。

後藤 8ミリ映画が1コマ1/18秒って話、したことあったろう？

美奈 いつ？

後藤 89年6月4日。

美奈 え？

後藤 海にロケに行った日。

美奈 ああ……なんか、聞いたかも。

後藤 そのとき、ループの話もしたっけ？

美奈 ループ？

後藤 フィルムを映写機にかけるとき、あえて持たせるたるみ。映写機はフィルムを定速で送り出

して、窓のところで間欠運動に変え、画を映して、また定速でリールに巻き取る。ループが  
ないと、運動のズレを吸収できずに、フィルムが千切れちゃうんだよ。

美奈 ……。

後藤 あ、ここだ。美奈、ちよつと、ハサミ取つて。

美奈 え？

後藤 ハサミ。

美奈 何するの？

後藤 いいから。

美奈 ……。

美奈、カラーボックスからハサミを取つてきて後藤に渡す。

後藤、ハサミでフィルムの一部をカットする。

後藤 これでいい。

美奈 ……なんか、世界に二人だけみたい。

後藤 え？  
美奈 あたし、マークんの言ってること、ほんとに理解できてるのかな？  
後藤 ……。

と、窓に灯台の明かり。

後藤・美奈 (振り返り) ……。  
美奈 晩ご飯の買い物、してこなきゃ。

美奈、去る。

後藤、ソファに腰かけ、フィルムの切れ端を部屋の明かりにかざす。  
風の音。

と、窓に再び、灯台の光がふわりとよぎる。

後藤の姿が一瞬、浮かび、暗転。  
風の音、高まり、遠くなる。

〈幕〉



第7場 「レポーターの声」の台詞は、当時放送されたニュース音声を書き起こしたものです。

参考文献

『16ミリ映写機操作技術テキスト』（神奈川視聴覚教育連盟）  
『映画を楽しく作る本』山崎幹夫（ワイス出版）